一宮市博物館　　1994.3

博物館だより

No. 17

特別展「一宮の名宝（Ⅳ）」

平成６年４月29日㈮～５月29日㈰

市文　紺紙金銀泥達摩多羅禅経（成願寺蔵）

展示室から

本特別展は、平成元年開催の『一宮の名宝（Ⅲ）』に続き、その（Ⅳ）として、市内に所在する重要文化財等指定の絵画を中心に構成するものです。当博物館で文化財の保護・保存を担当しており、併せて、修復成った重文足利義教画像・同文殊図、県文彫根来大香合、市文五位鷺図を、市民の皆様をはじめとする方々に公開します。また、中尊寺経がこの地方にも流布しており、市内外に伝存した紺紙金銀字交書一切経を構成する三巻を初めて一堂に展観いたします。

資料紹介

美濃の絹機について

旧蔵者　各務原市大野町
　　岩田道子氏(明治38年生まれ)
寄贈者　一宮市大字時之島三桝野
　　尾関良男氏

はじめに

昨年末、博物館開館前に受贈した機（以後、１機と略称、）に続いて、同一類型に属する絹機（同、２機、図２）を寄贈していただいた。ともに木曽川対岸の岐阜県各務原市に出自を持つものである。１機についてはこれをもとに「尾張の桟留機」として復原を試み、また桟留縞の復原も併せて追求した優れた報文がある。愛知県立起工業高校・一宮市博物館繊維講座講師佐貫尹氏等の稿になる「江戸期・尾張の桟留機ならびに桟留縞の復元」(『中京大学教養論叢』31-2　1990)（以後、１報と略称）と同氏稿「江戸期尾張の桟留機と岐阜縮緬機」(『産業考古学会報』53　1990)（同、２報）がそれである。ここでは屋上屋を重ねることになるが、新着資料の紹介を試みることとする。まず、江戸時代中期以降の美濃・尾張地方の織物生産の動向について簡単にみておく。

美濃・尾張地方の織物生産の動向

岐阜県美濃地方は享保期頃(1716－1736)以降、岐阜縮緬の生産で著名であった。その後、明和年間(1764－1772)に至って桟留縞生産の技術が伝わると、縞木綿生産が拡大していった。ともに、その技術は京都西陣から導入されたという。さらに、天明年間(1781－1789)

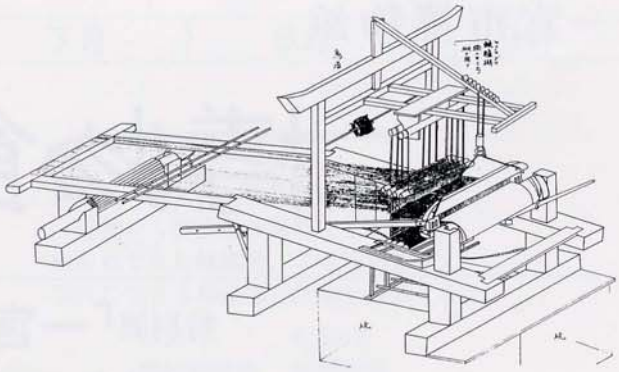


図１　京都の平機(川島織物提供)

には、やはり京都から菅大臣縞の織法がもたらされた。これらの縞木綿は主として岐阜市南部周辺の加納・笠松・竹鼻近辺の村々で生産されたといい、総称して美濃縞と呼ばれた。生産形態は出機制度が支配的であった。なお、明治中・後期以降は新銘仙と名づけられた常盤絣・御代絣等も織られた。

一宮地方を中心とした尾西地方も、綿作を基礎として縞木綿生産が発展した。当初は、前出の木曽川右岸地域で盛んであったが、文化・文政期(1804－1830)に至って尾西地方がより高度の発展を遂げることとなった。化政期から天保期(1830－1844)にかけて、他人労働を雇用するマニュファクチュア（工場制手工業）が広範に成立して、大坂と並んで全国一の繁栄を謳歌することとなったのである。ここでは、マニュファクチュア成立の技術的基礎として、織機の地機から高機へ

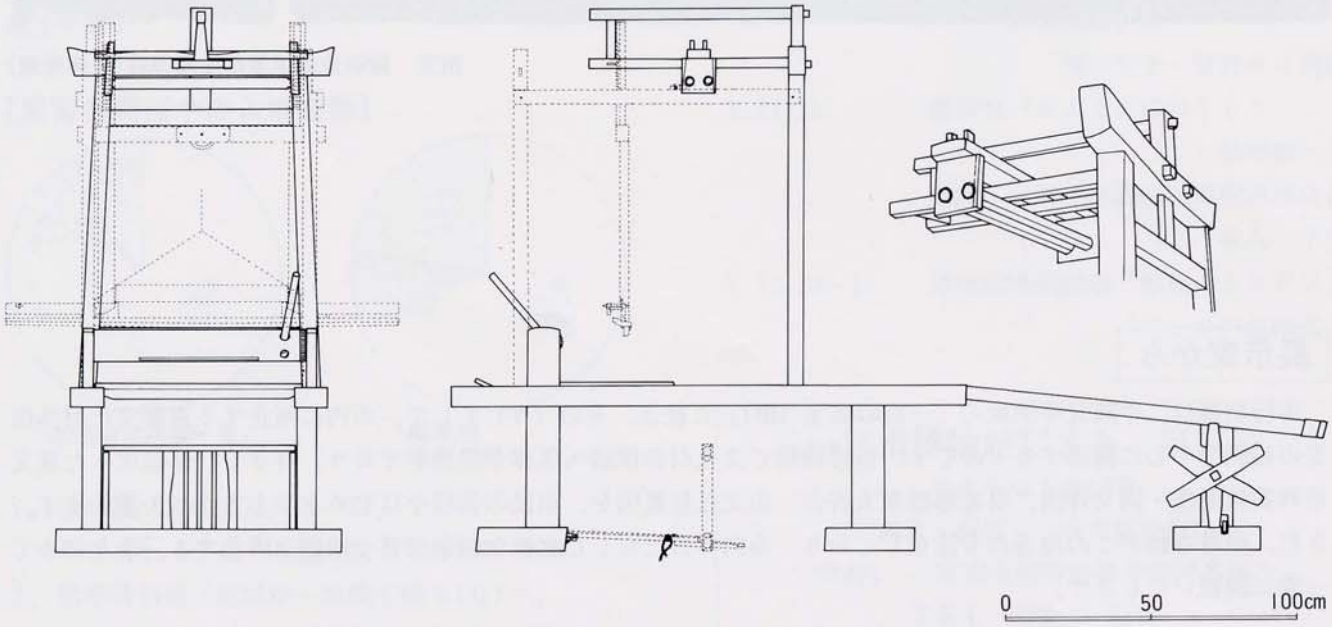


図２　各務原採集の高機(２機、作図：田中禎子)

の移行が考えられる。また、この時期の代表的な縞柄には、桟留縞・結城縞等があった。

美濃の絹機について

佐貫氏は、２報において「この機具の元の所在地が岐阜縮緬産地の中心からやや外れていることからこれを直ちに岐阜縮緬機とはいわないで、当面は西濃の絹機と呼ぶ」とし、「明治34年農商工業功労者調査」(「愛知県庁文書」、『新編一宮市史資料編』13所収)中の「文久三年(1863)…桟留一名寛大寺機ト唱へ」られる図との比較から、尾張の桟留機でもあることを発表した。復元機は機台の長さ2.7m、幅1.04m、高さ1.92m、綜絖は弓棚仕掛で吊られる（図４）。

２機は、全長3.00m、幅0.98m、高さ1.88mを測る。幅・高さは１機よりやや小さいが、全長は0.30m（１尺）も大きい。１機は鳥瞰したときに間丁（仕つぎ）が寸足らずに見え、寄贈者からの聞き取りにより、５寸(0.15m)縮めた（実際は１尺か）と言われるので納得できる。２機のその他の部品は、やや大きく、頑丈なものである。特筆すべきは、綜絖・筬吊り棚が残存し、また、綜絖を吊るロクロも京都の絹機（図１）のそれと類似した形態のものが取り付けられている。岩田さんがお嫁に来たときには、すでに点線のように厩機風に改造されてバッタン装置付きとなっていた（１機も同じ)。本来は絹機であるが、絹綿交織で主として自家用に数年間織られたそうである。

ところで、明治３４年調査によると１・２機の類型は「粗造ナル機器ニシテ織沢不完備ナ」機であり、それの改良として結城機が登場したとされる(図３)。全長2.20m程度の短機で、鳥居は地丁から立ち上がり、手機の中では一番頑丈な機となる。桟留機で桟留縞が、結城機でより高級な結城縞が織られたとされるが、２機は結城機と比較してロクロ装置・各種機具から分かるように極めて精巧なものであり、到底「粗造」とは言えず、美濃の絹機（２、３の聞き取りのみによっても羽二重絹等が織られていたことがわかる）と尾張桟留機を同一には論じられないと思われる。現在のところ美濃の絹機は２例しか検出できておらず、尾張桟留機の特定についても時間が必要であろう。今後も美濃・尾張における高機の形態変化について、調査を続けたい。

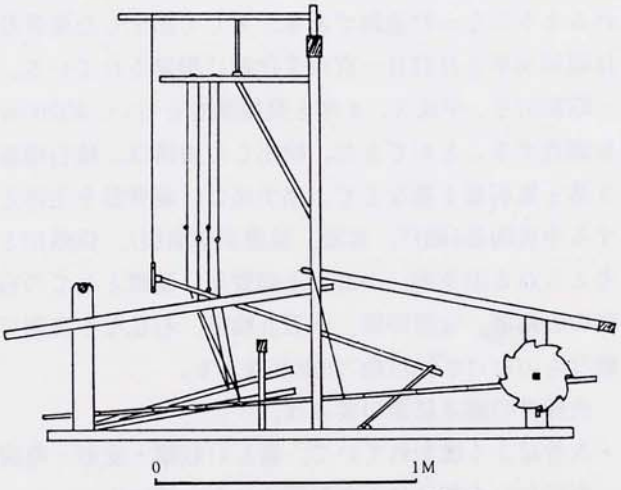


図３　尾張の結城機（当博物館展示図録『尾張のもめん』所収、小林章男氏「結城機のルーツ」より転載）

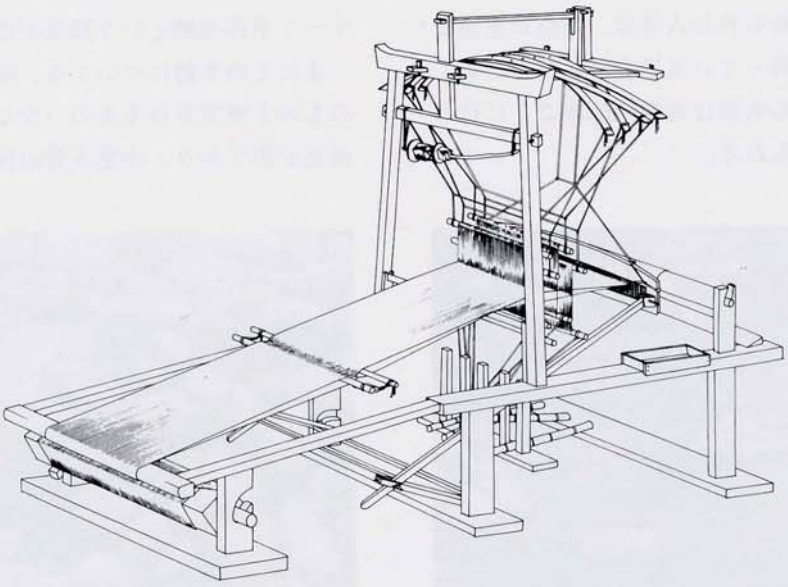


図４　佐貫氏復元の桟留機(作図：石田容子)

（文責：小野田雅一）

発掘調査の成果から

法圓寺中世墓出土火葬人骨の鑑定結果について

昭和57年、平成３、４年と３次にわたって実施した法圓寺中世墓の発掘調査で出土した火葬人骨について、京都大学霊長類研究所毛利俊雄氏による鑑定結果が得られたので、そのなかの特異事例を報告しつつ検討課題を述べてみたいと思う。

法圓寺中世墓は、大和町馬引字郷裏1286番地、法圓寺（西山浄土宗）境内にあり、標高7.5ｍ前後の日光川右岸自然堤防上に位置する。

昭和６年、本堂改築に際し境内裏手より、瀬戸、常滑、美濃須衛の蔵骨器10点が出土し、その存在を知られるようになった遺跡である。そして出土した蔵骨器は昭和36年３月27日一宮市文化財に指定されている。

昭和57年、平成３、４年と発掘調査を行い、約200㎡を調査することができた。検出した遺構は、積石墳墓５基と集石墓１基などで、出土品は、蔵骨器を主体とする中世陶器（瀬戸、常滑、美濃須衛窯製）、供献用と考えられる山茶碗、小皿、土師質皿、墓標としての石製の五輪塔、宝篋印塔、一石五輪塔、石仏など実測可能なものだけで総点数759点を数える。

火葬骨の鑑定結果の要点は、

・人骨はよく焼かれていて、著しい収縮・変形・亀裂を示し、大部分は小さな破片になっている。

・軟部が付着した状態で、比較的長い時間、高温（800℃以上）で焼かれたものである。

・ひとつの蔵骨器に納められた人骨は、部位が重複せず、左右ともに骨が残っている場合には左右がよく似ていることなどから火葬は通常一個体ごとに行われ納骨されたと考えられる。

・火葬骨すべてが蔵骨器に納められたとは考えにくく、また、どの骨を選択したということについて、一定のパターンは読み取れない。

個々の蔵骨器収納火葬骨の特徴、性別、年齢等は本報告書に委ね省略するが、こうした蔵骨器中より検出した火葬骨は62例、64個体分、そして基盤となる灰褐色砂層面で直径15㎝の円形の範囲内で検出した一括火葬骨１例、１個体分、の計63例、65個体分を数える。そのうち単体埋納と考えられる61例の内訳は、年齢は、成人期以降53例、思春期２例、不明６例であり、また性別は、男子24例、女子14例、不明23例であった。

この中での特異な埋納事例として、4P41、4P42と呼称した蔵骨器における２体合葬例を紹介したい。この事例は、平成４年度発掘調査で検出したもので、基盤となる灰褐色砂層面に、直径約60㎝の円形の土壙を掘削後、火葬骨を埋納した常滑の蔵骨器２個を納め、炭化物や骨片の混入した暗褐色砂質土で埋め戻し、その上に円礫を積み上げたもので、４号集石墓最下層に位置している。

この土壙から検出した4P41（14Ｃ後半）、4P42（14Ｃ前半）という２個の蔵骨器中に納められた火葬骨は、それぞれ２個体分の火葬骨が認められ、成人と小児の骨が混在していた。さらにそれぞれの火葬骨の同一性については、成人火葬骨については印象ではあるがともに女性であり、別人である可能性が高く、また小児骨についても別個体の可能性が指摘されている。

法圓寺出土蔵骨器中の火葬人骨は、上述のように総計65個体分が検出され、２体合葬例４個体分を除くとすべて単体埋納という結果が出ている。

またその年齢についても、成人あるいは思春期以降のものと推定されるもの（少なくとも20才以上）との所見が出ており、小児人骨の検出はこの２個体分のみ

写真１　蔵骨器埋納土壙検出状況

写真２　１号墓蔵骨器検出状況

である。

近刊の静岡県磐田市の一の谷中世墳墓群の発掘調査報告書によれば、火葬人骨は467個体分検出されており、そのうち小児骨の検出は、32例（約７％）である。また成人人骨で性別が判明したものは、男子60例、女子48例であり、この男女比は法圓寺中世墓検出人骨の割合と非常に近い数値である。

一の谷遺跡の状況を見る限り、小児埋葬はなされなかったとみることはできないが、法圓寺中世墓の発掘調査を実施した範囲内では、小児埋葬は皆無であること、原則的には１個体ずつ火葬にふされ、拾骨されること、そして小児骨が成人骨と合葬されているものに限定されることを考え合わせれば、一般的には小児は埋葬されなかったか、あるいはこの中世墓の別の場所にまとめて埋葬されていると考えるべきであろう。そして、当該合葬人骨は、女性（おそらく母親か）とその子供と推定されるが、何らかの理由で母親と同時に小児が死亡した場合は、母親と小児ともども火葬にふし、拾骨して蔵骨器に納める、こういった風習の存在を推定させるものではないだろうか。

また、この法圓寺中世墓においては、蔵骨器２個１組の埋納形態も注目されるところである。上述の4P41、4P42の土壙への同時埋納と、平成３年度調査において検出した１号墓の蔵骨器埋納状況、４年度調査で検出した、７号墓における蔵骨器２個１組の埋納、そして３、４年度調査で検出した２号墓の状況である。

１号墓は、東西3.6m、南北3.2mの積石墳墓で、その構築状況から蔵骨器は同時埋納と考えられ、その中に納められていた火葬人骨は、性別は不明ながら別個体のものという同定結果が得られている。また７号墓は２組の宝篋印塔を伴う積石墳墓で、２つの蔵骨器中

写真３　７号墓蔵骨器検出状況

から検出された火葬人骨は、ともに男性であり、別個体のものであるという同定結果である。さらに２号墓は１号墓と同様の規模を持つ積石墳墓であり、蔵骨器は１個体分しか検出されていないが、中央部よりかなり東側に偏した地点で検出されており、２個１組の埋納を意識した位置に蔵骨器が埋納されていた。

こうしたことは、近親者、親子あるいは夫婦といった血縁関係にあったものの埋葬に際しては、火葬人骨を蔵骨器にいれて埋納しておき、２個１組となった段階で再埋納しなおすという行為がなされた可能性を指摘することができるものかもしれない。

以上、とりとめもないことを思いつくままに述べてみたが、狭い管見の範囲内でのことであり、ご容赦いただくとともに、先学のご指導、ご教示をお願いする次第である。

なお「法圓寺中世墓発掘調査報告書」については平成６年度に刊行の予定で準備中である。

（文責：土本典生）

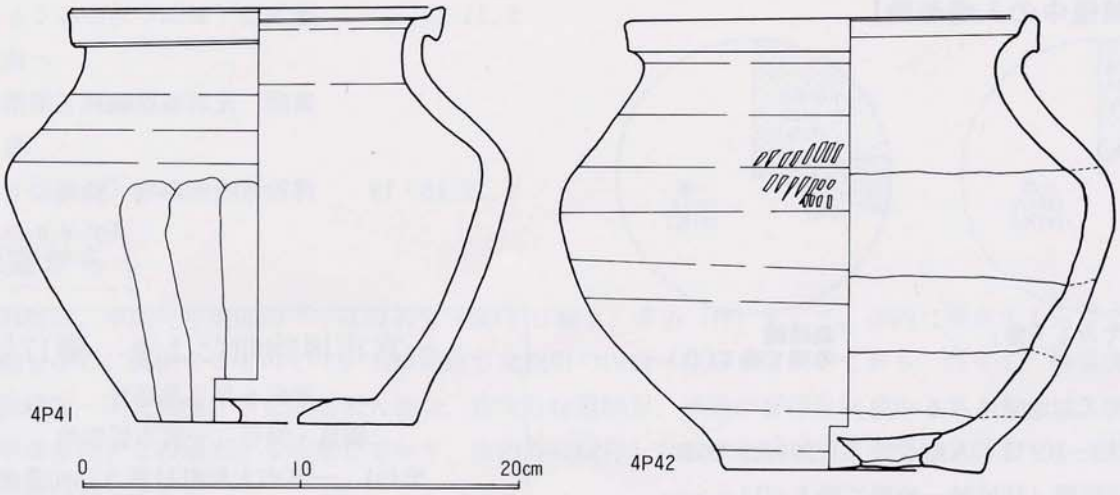


図１　蔵骨器実測図（４：１）

平成６年度の博物館

4月	5月	6月	7月	8月	9月
	4/29～5/29 特別展「一宮の名宝(Ⅳ)」 市内の絵画を中心に重文「妙興寺文書」、重文「足利義教像」、県文「彫根来大香合」などを展示する。		7/20～8/31 企画展「現代日本の伝統もめん」 近世から庶民の日常着として盛んに織られてきた綿織物。この展示では、現代に生きる綿織物の作品を展観する。 7/30・31 博物館講座「縄文時代の布を編む」 8/20・21 映画劇場		

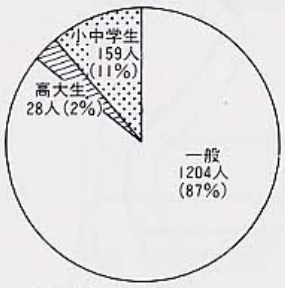
10月	11月	12月	1月	2月	3月
10/22～11/23 特別展(仮題) 「川から海へ－伊勢湾の漁具－」 木曽三川流域における汽水域から海にいたる漁具・漁法の変化を、弥生時代から古墳時代の考古資料を民俗資料と比較しながら展示する。		収蔵品展 「くらしの道具－今と昔－」 歴史をはじめて学習し始める小学校３年生のための展示。くらしの道具の中から、衣・食・住に関するものを中心に展示。	1/10～2/26 ☆春休み 博物館講座「土器を作る」 ☆春休み 映画劇場		3/18～3/31 作品展「手つむぎ・染め・織り展」 博物館繊維講座受講生・尾張もめん伝承会員の平成６年度の成果を展示。縞もめん、帯地、テーブルセンターなど。

※日程は変更することがあります。
※☆印は、日程が未定です。

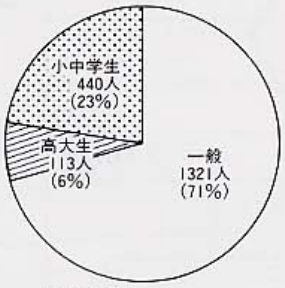
【ご来館有難うございました(5.9.1～12.31)】

尾関婦人会・游魚会・神守公民館・愛知県・江蘇省青少年囲碁交流会・市民の古代研究会・一宮市観光協会・一宮工業高等学校建築科３年生・大和南中学校・大志小学校・ボーイスカウト稲沢第７団・千秋中学校１年生・中部電力㈱・市民文化財めぐり・一宮市道路愛称選定委員会

【展覧会開催中の入場者数】



「古地図でみる一宮」



「結城紬
－地機で織る(Ⅱ)－」

1．企画展「古地図にみる一宮」
　9/18～10/11　入館者数　1,391人／20日
2．秋季特別展「結城紬－地機で織る(Ⅱ)－」
　10/23～11/23　入館者数　1,874人／26日

【博物館日誌(抄)】(5.9.1～12.31)

5．9．18～10.11　企画展「古地図でみる一宮」
5．10.23～11.23　秋季特別展
　「結城紬－地機で織る(Ⅱ)－」
5．11.20・21　実演会「糸つむぎと地機織り」
　演者　重要無形文化財本場結城紬技術保持会会員
　関つや子・野村キミ両氏
5．11.23　講演会「おふくろのぬくもり
　－結城紬－」
　講師　元茨城県繊維工業指導所所長
　坂入　了氏
5．12.18・19　博物館映画劇場「甑島のトシドン」
　「アイヌの結婚式」

一宮市博物館だより　第17号
平成６年３月15日
編集・発行　一宮市博物館
〒491　一宮市大和町妙興寺2390番地
ＴＥＬ　0586-46-3215
ＦＡＸ　0586-46-3216